

## 生物学的視点、積み木遊び、修理が生む愛着…

# 「分解」に光、学問超え刺激



受賞を記念して著作について語る(右から)善教さん、藤原さん、板東さん、桑木野さん

優れた研究や評論の著者を表彰するサントリー学芸賞の2019年度受賞者のうち、京都大准教授の藤原辰史さんら関西で活躍する4人が、大阪市内で開かれたサントリー文化財団フォーラムで講演し、受賞作の内容や研究の展望などを語った。哲学から政治、社会思想や芸術まで幅広い知の可能性が示された。

### サントリー学芸賞講演 藤原辰史 京大准教授ら4人

藤原さんの受賞作「分解の哲学―腐敗と発酵をめぐる思考」(青土社)は、生産と消費、新品と廃棄物、生と死の間にある「分解」に注目することで、社会のありようを見つめ直した書籍。海洋や土壌における生物学的な分解にとどまらず、「崩し、積み木遊び、修理を通して壊れたものへの愛着を深めるナポリ人、あるいは紙や鉄のくずを拾って暮らす人々の営みまでを射程に入れ、生産や創造の影に隠れた「分解」に光を当てた。

執筆の出发点について、藤原さんは「食べる、とはどういうことか、人文学や社会科学で考えたかった」と話した。そして「人間が食べる」「くずを食らう」「動物が食べる」という三つの「分解」を考えることで「人間の行為と、それ以外の動物たちの行為を共通の土台で語ることができるとは、新しい歴史学の可能性を探ったという。また「分解」の捉え直しに対し、創作者である芸術家たちからの関心が高かったことに触れて、「文

## 維新人気の通説覆す／荻生徂徠の思想再考／庭園空間の精神 迫る

・理・芸の融合という新しいジャンルに挑戦していきたい」と締めくくった。

関西学院大准教授の善教将大さんの「維新支持の分析」(有斐閣)は、有権者への意識調査や分析を通じて、2010年に登場した「大阪維新の会」人気を「ポピュリズム」とする通説を覆した著作。

善教さんによると、「ポピュリストへの熱狂的な支持」では、「大阪だけで支持が突出」「2015年の住民投票の失敗」「橋下徹氏が退いても支持率維持」などの現象を説明できない。そこで「府市間調整が大きな行政課題になっている」という大阪特有の問題に着目し、「有権者は、行政の拡大という形ではなく、維新という政党を媒介にした利害調整を望んでいる」と分析した。

「徂徠学派から国学へ」(ペリカン社)で受賞した皇學館大准教授の板東洋介さんは「日本思想史の最大の異端」として荻生徂徠の思想を捉え直した。「心」と「無」を中心とした仏教や儒教の教説に対し、徂徠や賀茂真淵の思想は「職人的な型」を重視した」と、板東さんは指摘する。

また、近代日本の西田幾多郎や鈴木大拙の仏教理解について「哲学的な部分を取り出したため、西洋哲

学になじんだ。ただ、その時にお経から捨象した部分というのは、仏教を仏教たらしめる核心部分だったのではないか」と語り、「今後は、型としての『修行』を考えたい」と結んだ。

大阪大准教授の桑木野幸司さんは、庭園という空間に込められた思想や観念を読み解いた「ルネサンス庭園の精神史」(白水社)で受賞した。

15〜17世紀の西洋の庭園を分析した桑木野さんは「最先端の美学が結集された空間は、当時の人々の精神のメタファーになっていた」といい、庭園を巡ることと哲学的・文学的な思考がリンクしていた可能性を指摘。現代の教育研究環境においても「アイデアを練る空間としての庭を造ることが大切ではないか」と提案した。

(阿部秀俊)